



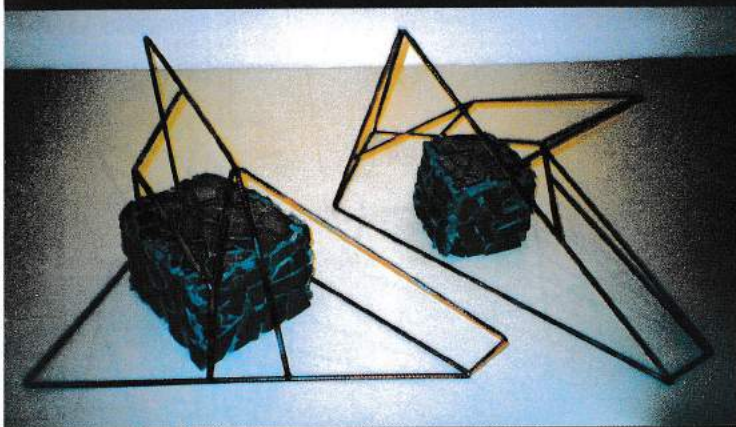
「サイバーシティ
20-2」



「祭り」



「A White Flower
in the Forest」



NO.35 2001.7

aqca

社団法人 日本建築美術工芸協会

【年中行事と都市空間】

● 年中行事その発生と意味 ●

年中行事は民族を象徴し、年中行事を知ることは民族の歩みを知ることになる。

(永田久著：年中行事を科学する)

慣習習俗の中で、特に年内のある時機時季に臨んで、特殊な営みが原則上毎年くり返し行われるものを指して年中行事と言う。中国では「歳時」「歳事」あるいは「月令」「時令」が日本の年中行事に相当する。

「年中行事」という言葉は、平安時代に始まったというが、行事そのものの成立はずっと古く、人間生活のあるところには年中行事はあり得たと言われている。それには1年間の単調な流れに節目をつけ、幾つかに区切りをつけるもの、という意味がある。言うなれば、それは年間の生活過程にリズムをつけるように、或る段階段階で特別な営みを行うことによって、次の段階へと拍車をかける推進力のはたらきをもっている。

日本の年中行事の発生は、農耕民族であったことから農耕のリズムに結びつくのが主である。

年中行事の日とは、ふだんの労働を休んで特別な伝承的行事を催す日である。したがって、「休み日」とか「遊び日」といわれる。しかし、ブラブラして休む日というわけではなく、本来はその日に一種の神祭りを行うものであった。(東北地方の南から関東の北にかけて、年中行事ないし休み日のことをカミゴトと言っている。)いわば、年中行事は日本人の季節感の実践的表現であると同時に、日本民族の心、日本人の発想法が隠されているものとみることができる。

● 風景が律する年中行事 ●

暦などを手にすることのなかった昔の庶民は、周囲の自然がもつ風土の変化を通して1年の運行を知り、それに則り、また応じつつ、生産過程を律していたと云う。暦が先で生活が律せられるというのではなく、生活が先で暦がきまるというものであり、生活の基本を支える生産は風土の天然自然の運行によってとり行っていた。特に、作物の種まきの時期などは、自然暦によって知ることが伝わっている。

木曾駒ヶ岳や秋田の駒ヶ岳には、雪が融けるに従って、山頂近くに馬の形が表れる。この駒形を望見して、近住の農民は初まきの時期を定める。白馬岳の名もその類である。群馬県片品村では今だに、武尊(ほたか)の残雪の形が種まき爺さんの姿を表す(5月下旬)と豆まきをすると云う。諺になった自然暦に「山桜が咲いたら麻を蒔かにならぬ」「山木蓮が咲いたら初蒔きをせねばならぬ、散ると田植を始めねばならぬ」(東北地方)「カッコウが鳴いたら粟を蒔け、トット(筒鳥)がきたら豆を蒔け」などがある。

木の芽や花のぐあい、鳥の去来、虫の初声、魚の去来が農事の折り目の目やすになった諺である。

自然暦が生産暦を規制し、その生産暦に応じて、年中行事がきまるというものであった。

その後、新しい技術の高度な発達にともない、また、近代に入って、暦が一般庶民に身近なものになるに従って、人々は人間自身のはたらきで、生活のリズムを律していくようになり、自然暦というものが次第に意味を失っていくことになった。

● 新たな年中行事の創出と都市空間 ●

現在、都市生活を見ると旧来の年中行事に対する一般庶民の関心は薄れつつある。特に若者たちの年中行事ばなれば時代と共に進んでいる。

“男はつらいよ”の寅さんの世界に登場する縁日は、もはや過去のものとなってしまうのだろうか。

街の店頭からは季節感が消え、都市に反映していた時節の光景を目にする機会も少なくなった。

祝日ともなると住宅街の門柱に、斜めにかかげられた旗竿にひるがえる日ノ丸をよく目にしたものだが、それもとんと目にすることはなくなった。

もはや、都市民の生活を構造的に規定しているものが、農耕のリズムにかわって消費や流通や情報となってきている。消費、流通、情報に結びついた、新たに創出された年中行事、それに一般市民は目を向ける。それは、年中行事の商品化と見ることもできる。

クリスマスには、赤・白・緑に色どられたクリスマスツリーやサンタクロースが街を賑わし、クリスマスケーキやチキンが店頭にならぶ。聖バレンタインデーには愛らしく包装されたチョコレートのプレゼント。母の日には赤や白のカーネーションが登場する。新たな地域おこしをもくろんだ他国から輸入された祭りのカーニバルやサンバの踊り。そして夜景を彩る新たな光景として、クリスマス前夜の高層ビルのファサードに浮びあがる明かりで描いたクリスマスツリー、樹木の枝ぶりに点灯するイルミネーションなどなど。これらはまさに新たに創出された都市の年中行事といえるものだろう。

三社祭の風景



祭りの群衆

写真提供/加部敦子



名町内会に設けられた処点



熱気を発する神輿の練り回り

写真提供/加部敦子

● 都市に生きる節供・祭りとその風物詩 ●

東京の街を彩る旧来の年中行事にどんなものがあるだろう。

正月 — 1年で最も重要な節の日である正月は、年神を讃え、迎えることにいわれのある「おめでとう」という言葉を交わす。門口に松かざりを飾り、室内に鏡餅(年神の御神体として正月行事の中心に位置していた)や正月飾りをおそなえし家族でおせち料理を囲み(年神に供える料理を「節供料理」といい、それが縮まって、「おせち」となった。)、1年中の邪気を払って延命長寿を願って屠蘇を飲む。また親達は子供にお年玉を与える(年神から与えられる魂であり、年頭にあって今年精一杯生きる活力をうみだす手形)。

節分 — 冬から春への折り返しとなる節分には、疾病や災害を追い払う鬼やらいの行事がある。家庭で神社で「福は内、鬼は外」の掛け声と共にまずに入った福豆をまいて、鬼退治をする。

桃の節句 — 桃の節句の雛祭りは幸を祈る春の祭典である。女の子の健やかな成長と幸せを祈って雛人形を飾り、桃の花をめぐる。

端午の節句 — 男の子の日である端午の節句(今は子供の日)は菖蒲の節句とも言われ、男子の健康と出世を祈って鯉のぼりを立て、ちまきや柏餅を食べ、菖蒲湯に入る。空に悠然とたびく鯉のぼりは都市の空にすがすがしい5月の風を感じさせ、雄々しい勢いを感じさせる。鯉は立身出世のシンボルである。

七夕 — おりひめとひこぼしが年に1度だけ逢うことが許される七夕は、ロマンチックないわれのある「星まつり」である。も

ともと七夕は畑作の収穫祭で、麦の実りを祝い、胡瓜や茄子の成熟を神に感謝する行事であったと云う。ガスった東京の夜空に天の川を見いだすことは困難ではあるが、切り出した笹の葉をしつらえ、願いをこめた短冊をつるす習慣は今も続く。

盆踊り — 盆を迎えた夏の風物に盆踊りがある。浴衣姿で中央の櫓のまわりに一つの輪になって、一つの歌に合わせて踊る、宵にはじまる夏の夜のイベントである。地元民のコミュニケーションの場でもある。(そもそも盆踊りは、盆に訪れる神や靈魂を迎え、慰めるために捧げられた神迎えと神送りの踊りである。)

花火大会 — 夏の夜の呼びものに、両国を代表に、川開きの花火大会がある。夏の夜空に咲く花は、はげしい音と光のきらびやかさと同時に、一瞬にして消え失せる泡沫の美を持つ。これに見る者は人生を重ね合わせる。都市に住む者にとっては日頃のうっぷんを晴らす絶好の呼びものとなっている。

市 — 朝顔市(入谷)ポロ市(世田谷)酉の市(鶯神社)といった商いの市は、買い物客、見物客でゴッタがえる人気のある年中行事である。酉の市は商人や芸人にとっては最も重んじられるものであり、どうか儲かりますように、ご利益がありますようにと祈って福熊手を買って行く。寿司屋や料亭などの店頭には毎年買い直された福熊手が飾られる。

大晦日 — 大晦日の晩には年越しそばを食べ、除夜の鐘を迎える。「細く長く、来年も幸せをそばからかきいれる」ことを願い、「108つの煩惱を解脱し、罪業の消滅」を祈りつつ年を越す。

祭り — 最も華やかな年中行事はなんと言っても祭りである。三社祭、神田祭、山王

祭に代表される江戸から続く祭りは街を賑わし、地元の活力を引き出し、人々に興奮と目まいを起こさせるエネルギーの結集である。

人間の空間感覚は、視覚・聴覚・筋覚・嗅覚そして温度といった多数の感覚的入力との総合であると云う。

祭りはこの空間感覚を時間と空間の中に見事に取り込み、人々を興奮のつばに引き込む。揃いの飾りをつるした町内をイキな姿の若衆達が威勢のよい掛け声を合せ、神輿を担ぎ練り回る。気合いと熱気が動き回る。山車をひく行列、お囃子や太鼓、木遣りや手古舞、獅子舞や組踊りが登場する。神社の境内に、路上に臭いをそそる屋台が軒をつらねる。

それは視覚をかり立てて目を見張らせ、運動と汗を感じさせ、音と臭いも手伝って、人々を気合いと熱気につつまこむ。祭りは現代の都市にあってもなお、生活のリズムと活力を産み出す生命力のある集団の活力形態として生き続けている。

地球環境・リサイクル・地域特性・町おこし村おこし・歴史との共生・自然との共存…が叫ばれて迎えた21世紀、私達は問題解決の糸口を科学技術のみにたよるのではなく、同時に、自国に生れた年中行事をひもとくことで、実現可能な新たな視界が、新たな意識が生れてくるように思われてならない。

調査研究委員長 日高単也・記

〈参考文献〉

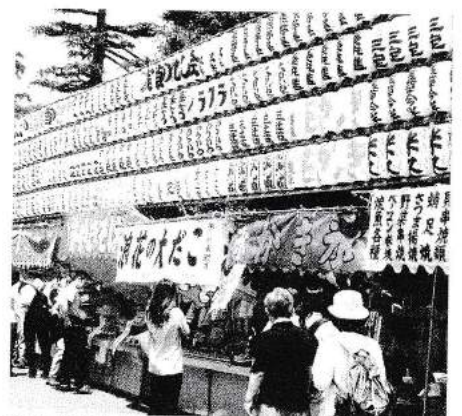
- 和歌森太郎 著 年中行事
 永田 久 著 年中行事を科学する
 石井研士 著 都市の年中行事
 弓削 悟 編著 日本の年中行事
 白鳥文子 著 日本の年中行事



神社の舞台上にオカメとヒョトコが登場



山車の上から太鼓の音が奏せられる



臭いをそそる屋台が軒をつらねる

【東京「市」巡り】

明治五年、政府は太陰太陽曆を廃し、欧米にならって太陽曆を採用した。いま我々は西曆、平成という二つの「時」のモノサシを持っている。しかし旧曆のモノサシを捨ててしまった訳ではなく、さまざまな行事の中に今も生きている。

かつて月の満ち欠けは月日の基準であり、生活の中に、各種行事にと人々にとって共通な自然の「こよみ」であった。新月を朔、満月を望という。朔は第一日、初めというほどの意味で、「ついたち」所謂「月立ち」：隠れていた月が出てくる、ということによる。因みに、「みそか」は「晦日」で晦いこと、「つごもり」は「月隠り」で、旧曆では毎月の三十日であった。また、それらの半ばが満月の十五日になる。このような曆の考え方は古く、メソポタミアのシュメールや古代ローマにもみられる。

● 月と市 ●

◆1月15日。藪入り、旧成人の日

旧曆でいえば正月望月、奉公人達が休みをもらって実家に帰る日であった。日々満ちてくる月の姿を仰いで、その日を待ち望んでいた。

各月15日の行事をあげてみると、2月は釈迦涅槃会、3月は聖徳太子祭、5月の15日やその前後は下谷根岸三島神社祭礼、神田明神神輿渡御祭(大祭は9月15日)、三社祭、そして多くの夏祭りが催される。6月は山王祭。7月は藪入り、中元、またその前後は、町の辻や道端に出店を設けお盆の準備の品々を売る「草市」そして盂蘭盆会。この時期は特に植物が主役の「市」が開かれる。

話の始めに、景気の良い満月に関わる行事を先にしたが、新月と満月の丁度半ばが上弦月(右半分の月)：8日ということになる。

◆7月6～8日。「朝顔市」

入谷鬼子母神の大通りは、車道まではみ出して歩道両側に市がたつ。片側は食べ物中心の出店、もう一方が朝顔店で、200メートル以上も並ぶ。僅かな市の歩道は出店のひさしと建物に扶まれ暗く、昼間でも電灯を点けている。ゆかた姿の人達が手に朝顔の鉢を下げながら行き交う様子の、なんと似つかわしいことであろうか。

◆7月9・10日。「ほうずき市」

浅草観音四万六千日はご存じのように、この日参詣すると四万六千日分に該るといふ。品なく計算すると126年分、一生分に余ってしまう。有り難いことである。昔、青ほうずきは虫切りのおまじないとされ売られていたそう。また赤ほうずきは雷を連想させる。観音堂では三角形をした雷除けのお札がいただけ。

◆8月15日(旧曆)、「十五夜」

各家ではススキを活け、月見だんご、芋煮、柿、梨、ぶどうなどを供えて収穫に感謝する。竿を持った子供たちは、にわか盗人となり他家の供え物を盗みに行く。心臓をドキドキさせながら息を殺し、隣家の叔父の家の縁側に忍んで行ったことを思い出す。

また満月に戻ってしまった。

6時頃、東の地平線からとてつもない大きさ

で昇る月の姿は、いつもながら信じられない。満月を過ぎると、月の出は1日に約50分程遅くなり、右側から欠け始める。十六夜月、立待月、居待月、臥待月、宵待月と、日一日の変化の様子が趣のある言葉で表現されている。

◆10月19・20日。「べったら市」

日本橋本町の宝田恵比寿神社を中心に、近くの稻森恵比寿神社までの縦横の小路は、車が遮断され出店でいっぱいになる。恵比寿講から始まったこの市は、やがてべったら漬が評判となりこの名前になった。浅漬大根に糍をべったり付けたからとか、荒縄でぶらさげて帰る途中、手や着物にべったり付いたからとか、その辺が名の由来らしい。200店以上の出店のなかで15店ほどのべったら店が出ていた。

◆11月。「西の市」

足立区花畑の大鷲神社(旧鷲大明神)の祭礼から始まったとされ、関東が主で40ヶ所以上で市が立つ。近年は浅草の鷲神社、新宿の花園神社が有名で多くの人々で賑わう。ここで開かれる「熊手市」では、商売繁盛、大入り叶うの飾り熊手が縁起物として売られている。一つの飾り熊手には、多いもので200以上の縁起のよい品々が集められており、何でも取り込み、どんな願いも叶うように仕組まれている。実に日本的なオールマイティーなのである。

◆飾走15・16日。世田谷「ボロ市」

420年の歴史をもつこの市は、天正年間に



入谷「朝顔市」



世田谷「ボロ市」



日本橋本町「べったら市」



新宿花園神社「西の市」

楽市の六斎市(毎月6回開かれる市)として始まり、やがて時を経て近郷の農家を対象とした農具、古着、正月用品を扱う「歳(とし)の市」となる。明治期より正月15・16日にも開かれるようになり、代官屋敷を中心に付近の道路は全面的に開放され、現在では700店を超える出店と人々で賑わう。ポロ市もかつて満月が開催の目印だったのであろう。

◆師走17・18日。「羽子板市」

これも「歳(とし)の市」の特殊化したもので浅草観音で開かれる。土地柄、外国の観光客と思われる人達も多く、数十ある羽子板店のその華やかさに見入っている。所狭しと並べられた羽子板は、大小さまざまに歌舞伎ものから当世人気スポーツ選手、タレント、歌手、アニメキャラクターまで、価格も数百円から数十万円と、威勢のよい掛け声の中で買われてゆく。なぜか追い羽根は別の店になっていて、脇に数店出していた。ムクロジの黒玉が縁起的に嫌われたのかと、ふと思った。これ以降年末まで、東京の各地で途切れることなく「歳(とし)の市」が続く。

● 現代の市 ●

月から開放され、西暦が採用され始め125年を迎えた今日、東京には連日「市」が立っている。この「市」を専門にしているのがビックサイトで、食品、化粧品、宝飾、おもちゃ、ゲーム、スポーツ、健康からインテリア、建築、機械、情報技術、環境、エコロジー等々すべてを網羅している。年間250件を超える「見本市」が開催されているとのことである。

街の中に目を向けてみると、昨年の年末から本年年初に掛けては、20～21世紀のイベントがさまざま催された。

◆12月24日。「光の市」(?)

野次馬の小生は夕刻の寒い中、そのイベントの一つ丸ノ内仲通りの「東京ミレナリオ」を見に出掛けた。東京駅側からの一方通行で、仲通りに入る100メートルほど手前で既に広い通りは見物人で埋め尽くされ、ほとんど動けない状況だ。遠く眺めると入り口左右に、黄、赤、緑、青などの電球を配して六対のアーチが暗いなかで輝いている。やっとのことで入り口に達すると、そこは天上界を想わせる多彩な光の洪水、無限に続く光のドームであった。都市の一画が光の劇場となるこの企画は、阪神大震災のち95年から「神戸ルミナリオ」として震災犠牲者の鎮魂と、未来への希望の象徴のもと、チャリティーを兼ねて催されたのが始まりのようである。低迷する日本経済の希望の光としたいとの願いも込められているように思えた。

街の中で催される大規模でパブリックな「市」がある一方で、個人の「市」もある。地域の公園や広場で週末・祭日に開かれるフリーマーケットやリサイクル市。それぞれの理由で家庭内で不用になった品々を、必要とする人に活かしてもらう場合や、個人の得意を披露して売る場合など、大地を店として開かれる。更にプライベートなかたちがガレージセール。たぶん戦後アメリカ文化の影響から生まれてきたのだと思うが、自宅の一画を仮の店として、不用品を並べて、通る人に活かしてもらう。

更に更にプライベートで、しかも超パブリックな「市」のシステムを現在我々は全世界的規模で、実に容易に利用しはじめた。

◆「ネット市」(私の造語。インターネットを利用した個人のホームページ上での市)

全人類を直結するこのシステムは、たしかに革命に違いない。個人ひとり一人が「市」の主権者であり同時に「市」の客、世界の中心であり同時に世界の末端という図式で何千万という「市」が開かれ始め、物や情報が行き交う。国・場所・距離・時・季節から開放され、社会的ヒエラルキーからも開放されようとしている。

もともと“都市”というものは、自然に対して人間が造った空間であり、反自然的であるのだが、江戸時代以前の場合は自然と出来るだけ共存しようとし、これを取り込もうとしてきた。

明治以降、ヨーロッパ・アメリカからみればアジアの辺境の地に、西欧的都市の実現を目指した政府は、そのかたちを模倣する事から始めた。130年を経た今日その結果の中で我々は生活している。

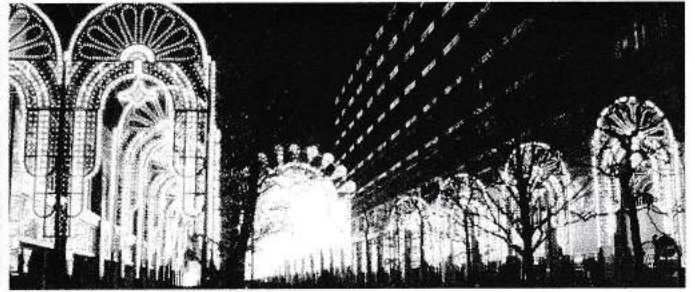
中心-末端という時代は終わりつつあるが、我々はますます自らの足元をしっかりと見据えることが重要になってきているのではないだろうか。

東京の「市」巡りのなか、五感を総動員させ、程良い疲労感をからだに感じながら、このように思った。

調査研究委員 小野行雄・記



浅草「羽子板市」



丸の内「東京ミレナリオ」



代々木公園「フリーマーケット」



東京ビックサイト

時代の華一輪



aaca会員(テキスタイルデザイナー)
東北芸術工科大学 教授
YANAKA RYOUKO
山中 良子

美大卒業後勤めた設計事務所を2年で退職、フリーランスデザイナーになって初めての大きな仕事が、大分県立図書館(設計磯崎新)ホールの円形カーペットのデザインでした。エメラルドグリーン系はどうかとの御依頼に対して、コンクリート打ち放しの力強い吹き抜け空間に対してもう少しパワーのある色彩の方がと提案したのが取り挙げられました。

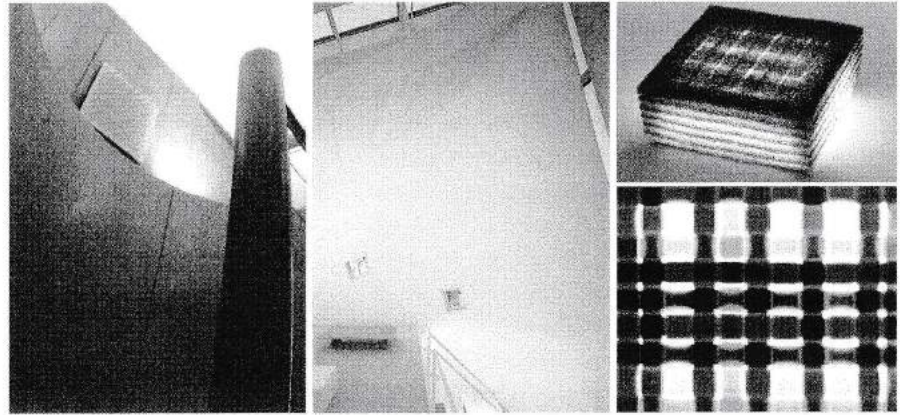
一抹の不安は、設置されて自分なりに納得がいき解消されましたが、建築雑誌の表紙を飾り、原広司氏の建物の紹介文の中に「美しいカーペット」とあったのを見出し、良かった!と思ったものでした。思えばそれ以来、空間と素材、色彩、光り、のドラマに心奪われて、世界のあちこちを見歩き、自分でもドラマ作りに参加させていただいてきました。空間の中で相互の対話ががり個々の存在が、ひとつの空気と

なって生き生きと息ずきくを感じる時のうれしさは例えられません。色彩が、素材がしゃべり過ぎたり、時には声が小さすぎて意味をなさなかつたりしないように、それぞれの言葉に耳をかたむけていたいと思っています。

ここ数年、光りが半透過する素材の存在感と、バックライトに浮かぶ色の重なりに注目しています。光の変化によってその存在が変幻し、時に彩に、時には希薄になる自然な変化を楽しめればと思うのです。そ

して機能目的に造られ狭い用途に限定されて日の目を見ない素材から、思いがけない魅力を引き出すことに熱中しています。昨年末、山形の病院の各コーナーに収めたアートワーク群が、バックライトのやわらかい光と色彩、ソフトな素材感が、来院者の心に伝わることを願っています。

撮影：大野 繁(メディア・ユニット)
中川敦玲(彰国社)
中道 淳(ナカサアンドパートナーズ)



aaca事業委員
(株)集研設計・代表取締役
ISUIJI KATUHIKO
石氏 克彦

aacaの会員の皆様方の中には、音楽を愛好される方が大変に多いように思います。私もその中の一人に過ぎませんが、た



またま下手なヴァイオリンを趣味にしてアマチュアのオーケストラに入り、週一回の練習と、その成果を披露する半年に一度の定期演奏会を楽しんでいる者です。

私とヴァイオリンとの出会いは、私が中学2年の頃7つ年下の末弟がヴァイオリンを習い始め、それを見ていて大変面白そうなので母に頼んで私も習わせてもらったのが始まりでした。

楽器の方は一年後の秋に、それまで移り住んでいた栃木県から東京へ引越したため一時中断しましたが、大学に入ったら何をおいてもヴァイオリンをやりたいという気持ちが強く、従って浪人は絶対しないようにと勉強もし、大学も選びました。

ここで天下の大前研一氏を引合いに出

してはなはだ恐縮ですが、氏もクラリネットに熱中し、何が何でも現役で大学に入ってオーケストラでクラリネットを吹きたいとの思いから、東大法科をあきらめ、たまたま合格した早大理工学部に入学したとのことです。似たような人が結構いるんですね(でも、その後の人生は人により大違いですが)。

どんな趣味、どんな芸術も、楽しい人を感じさせるからのめり込む人がいるわけですが、音楽を演奏する場合の楽しさの源、それは音楽が再現芸術であるということにあるのだと思います。パッハやベートーヴェン、モーツァルトなど、偉大な作曲家の音楽をたとえ表現は未熟であっても、自分自身でこれら天才の作品をじかに体験でき、おこがましくも天才の精神に直接触れるという感動を味わえるという点が楽しみの源だと思います。

いつでしたか、定期公演でベートーヴェンの第9シンフォニーを演奏した折、聞きに来てくれた友人が「没後200年近くもたった今なお、自分の曲がしかも素人集団によって演奏されていると知ったら、天国にいるベートーヴェンもって瞑すべしだと思った。そう思ったとたんに、芸術の偉大さに思わず涙がこぼれた(演奏の質や内容に対してではなく)」と言ってくれたとき、私もなるほどと妙に納得いたしました。



中央フィルハーモニア管弦楽団第23回定期演奏会



aaca会員
ランドスケープデザイナー
SUZUKI SHODO
鈴木 昌道
埼玉県蓮田市末広2-3-5
TEL 048-768-2613

ランドスケープの創造と伝統

現代のランドスケープデザインの表現思想とは一体何なのだろうか。何を心の拠り所にしてしているのだろうか。

過去の日本庭園にしても、西洋庭園にしても、その時代の思潮が反映されているのが明確なのだが、現代は国際的にデザインの方向性に「哲学」を失っているように思われる。

現況を眺めて見ると、伝統的庭園の形態の模倣やガーデニングブームのように英国風園芸のコピーであったり、都市公園でもツギハギだらけの即ちパッチワークのデザインだったりして、そこには何の思想も表現されていない例が多い。

歴史的な庭園デザインの発想は時代により異なっている。

古代の神々の時代は自然信仰が強く、神の依り代として大樹や巨石が崇められたり、祭の広場として白砂敷の空間が設け

られたりした。中国から外来の宗教思想即ち華嚴宗・浄土宗・禅宗などの仏教や道教などが入って来ると、それぞれが庭園に様々な影響を与えた。明治になって自然主義思想が盛んになると、仏教や道教的色彩は薄れ、自然を写實的に表現する傾向が強まった。

西洋では中世迄見るべき庭園は少なかったが、イタリアルネッサンスから著しく庭園が発達した。テーマには聖書におけるエデンの園、即ち楽園の思想やギリシア神話などが題材として表現された。さらには自然主義思想により自然を模した風景式庭園が出現した。

以上のように庭園のデザインには宗教の影響が大きく、永く続いたが、後に自

然主義思想に変わり、時代が強く影響を与えていたことがわかる。

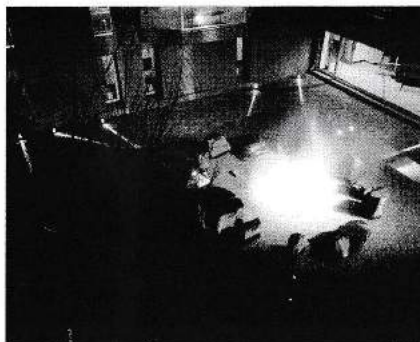
デザインには常にその時代を反映していなければならないと私は考えている。私の場合には周辺的环境や、建築などとの係わりから肉眼では直接見えない世界、自然景観の抽象化、自然現象の形象化に大別される。

上記何れの場合にも共通するのは、現代の芸術や技術、生活などからの創造と日本の風土から生まれた日本人の自然観や美の表現にある伝統を大切に融合させる事にある。

見えない世界とは科学によって捉えられた宇宙などのマクロスケープや顕微鏡で見るようなミクロスケープの表現である。

自然景観からの発想は、現実の風景ではなく、私の心象風景の抽象化になる。

自然現象からは、風・光・雨・霞など形態のないものの造形表現である。



「環状星雲」JRDモトリ-南浦和中庭



「心象」茨城県庁東庭



oaca会員
造形家
YASUKOCHI ATSUKO
安河内 敦子
東京都目黒区中目黒5-24-27
TEL 03-3793-8052

「ガラスに魅せられて」

光を受けて透明に輝き、あるいは鮮やかな色彩を放つ。ガラスの美しさは、いつの時代にも人々を魅了してやまない。けれども、ガラスは冷たく硬くそして一瞬で砕け散ってしまいはかない。長い歴史を持つガラスに対する人々のイメージはこの様なものではないでしょうか。しかし、今やガラスは、建築用大板ガラス、グラスファイバー、ファインセラミックスなど、今までのガラスのイメージだけでは捉えられないほど素材として発展をとげ、様々な可能性に満ちた素材となっています。

建築設計、インテリアデザインの仕事

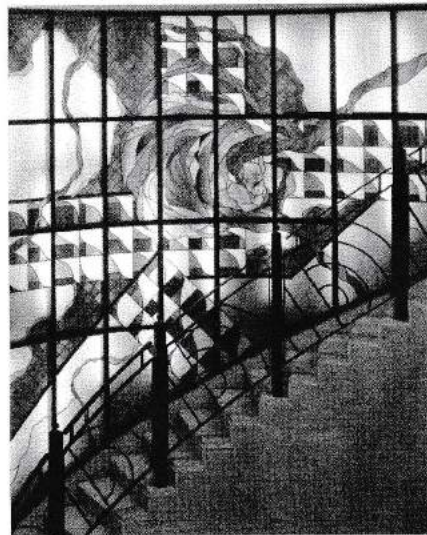


写真-1 自由と創造
東京モード学園エントランスホール 1987.12 東京
4000×4500

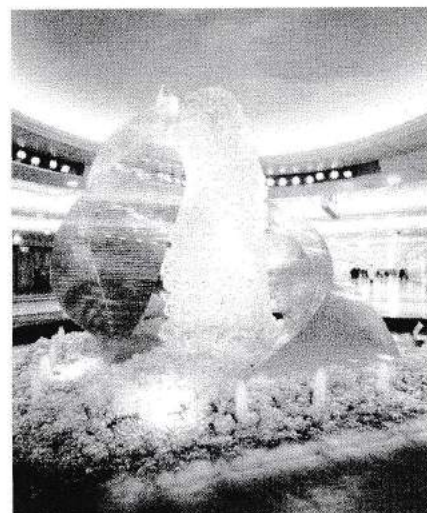


写真-2 光彩
サカエチカ クリスタル広場 1999.11 名古屋
H2400×W3600×D3600

がしたくて勉強をしていたのにガラスのメーカーに就職し、デザインの勉強のためにイタリアに行って、ステンドグラスの工房で修行をはじめた。ステンドグラスに出会って、ヨーロッパのステンドグラスが教会やアールヌーボーの装飾美術の世界のものではなく現代建築の中でもモダンステンドグラスとして建築の中で役割を果たしていることを知り、ステンドグラスを通して建築にかかわりたいと思いました。帰国して20年余り、都立大学の大ホール、東京モード学園エントランスホールなど、ステンドグラス壁面の制作を手がけ、最近ではガラスによる立体造形にも取り組んでいます。

平成11年、名古屋・栄の地下街「サカエチカ」クリスタル広場に、オブジェ「光彩」の制作をしました。この作品は、最先端技術によって得られた「ガラス素材と加工法」を使った直線的な造形と、高度な「職人の匠の業」によって生み出された柔らかい曲線が交錯した「宙吹きクリスタル」によって構成されています。高さ2.4m、台座の大きさは周辺玉吹きを含めると3.6m 四方、総重量6.4t のガラスを使用しています。

中央のオブジェには、直径300mm～100mm の大きさの宙吹きクリスタル約450個を高さ2.4mまで積み上げています。中央のオブジェを包み込む様に置かれた積層接着による厚板高透過ガラスは、寸法精度を高めるためウォータージ

ェットによりカットしています。一辺1,500mmから40mm まで150枚余りの三角形の板ガラスは小口の一辺を45°のプリズム状に加工し、カット面を研磨しています。これらのガラスは微妙にずらしながら接着積み上げられています。この形状は、動きを感じさせる形態でありながら重心の安定性をこわすことなく自立させ、直線の中から曲面を作り出し中央に置かれた宙吹きオブジェとの融和を図っています。

三体のオブジェの周りには2万個におよぶ小さな吹きガラスの玉を敷き詰め、その玉は噴水の作り出す泡と一体となって池の中に沈み込む様に仕掛けられています。また、これらのオブジェには周囲からライトアップし、オブジェに輝きを与え、クリスタルに当たった光は四方に飛び交い、天空をイメージしたドーム型の天井に虹を結んでいます。

ガラスが他の造形素材と大きく違うのはその透明性が作り出す存在感と光の屈折によって作り出される光そのものが造形のファクターとなるところです。ガラス造形の魅力は、透過する光によって空間に関わり、自然の力が作用しながらその空間はガラスの持つエネルギーによって光となって空間に飛び交い人々にメッセージを発して行くところでしょうか。そんなガラスを通して「私」が次に何を生み出すのか。いつもどきどきしながら新しいテーマと対峙しています。

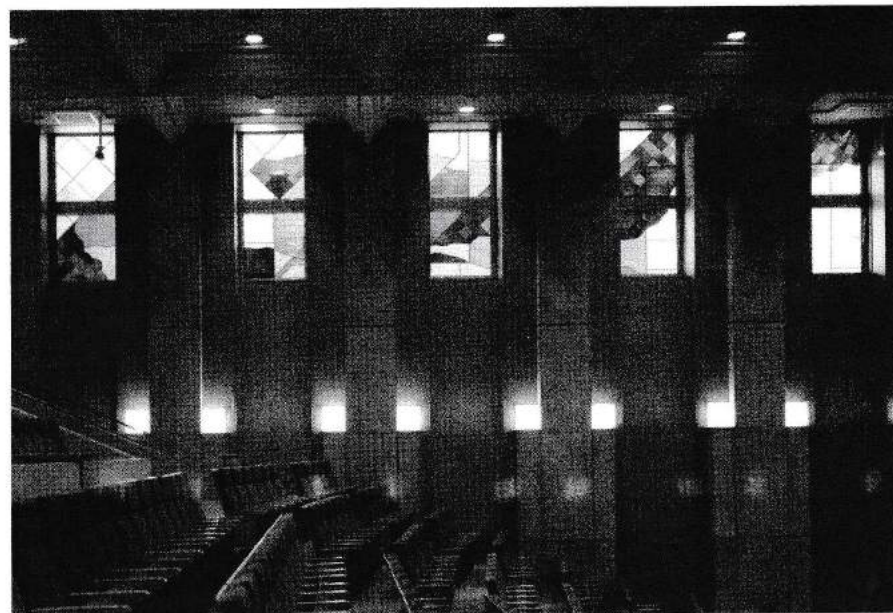


写真-3 秩序と情熱のエネルギー 東京都立大学 大講堂 1990.2 東京 H1235×W1300×20面



パンステージプロローグ
オーナーシェフ
YAMAMOTO KEIZOU
山本 敬三
横浜市青葉区美しが丘西1-3-10
TEL 045-902-7879

「パン作りに魅せられて」

私のお店は、買い物のついでではなく、わざわざ買いに来ていただくことを目的に、わざわざパン屋として、開店いたしました。

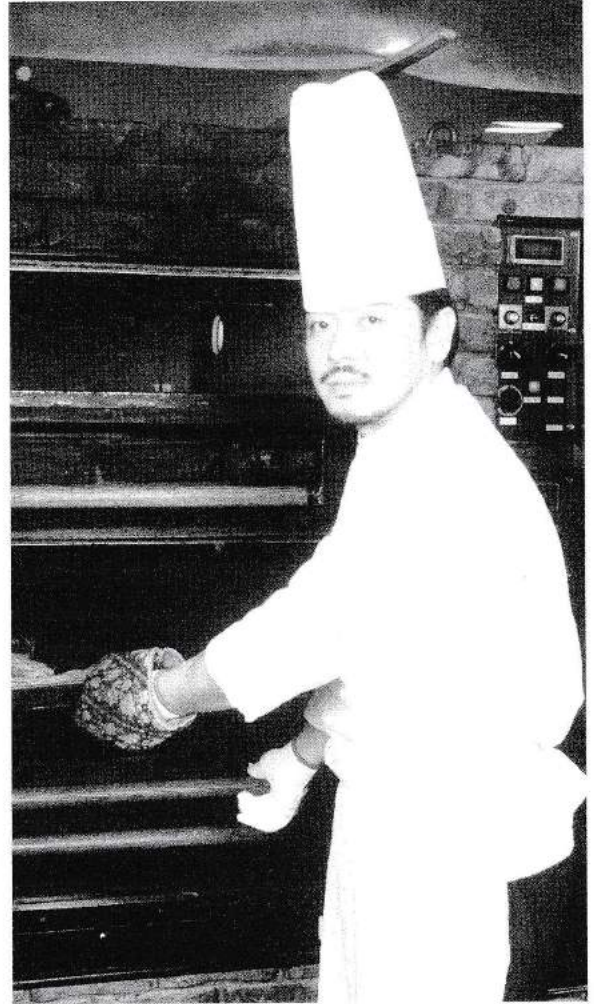
ヨーロッパの町の朝はパン屋から始まります。夜明け前からのミキサーを回す音や仕込みの音が漏れ聞こえ、やがてパンの焼ける匂いが辺り一面に広がってきます。パンの焼ける香りは町に溶け込み生活の一部となります。

都市部には大型のパン屋が多いものの、基本的には町々に住民の数に応じて小規模のパン屋が点在しています。パンは日本の米と同じ基礎的な食料品であり、住民の生活を支えています。日本のパン屋はヨーロッパに比べるとおかれた位置は多少異なるかもしれませんが、そこに生活している人々とのコミュニケーション

によって発展していく形態は同じです。パン作りは以前に比べてとてもやさしくなっています。これは先人達の素材、製法の研究製造機器の発達、生地と発酵のメカニズムの解明などが簡単にパン作りができるノウハウを作り出したからです。しかし、結果的にパンの味は均一化され、特徴のない平凡なパンになってしまったのも事実です。

フランスではの修行時代長老が「昔のパンはもっとおいしかった。昔は一つのパンを作り上げるのにもっと時間をかけて丁寧に作った」といっていたのが思い出されます。歴史的には統制の時代を経て自由競争の今日こそ、昔の味へもどらなくてはいけないのではないのでしょうか。リテイルベーカリーは大型ベーカリーとは違ってどうしても作り手の資質が問われます。プロのパン作りとは作るパンをイメージすること、そしてイメージした

パンが作れることです。それにはどのようなクラフトにするのか、どのようなクラムをもったパンにするのか、食感は、香りはなど、科学的な裏づけを確認し、想像力を駆使してレシピや製法を選び、自在に製品を変える技術が必要です。古きを訪ねておいしかった味を再現したり、製法を見直したり、組み合わせで新しい味を見つけていくことも必要になってきています。パン作りは基本に始まり基本がすべてです。リテイルベーカリーは手作りが切り札ですので、おいしいパン作りのための多少の煩雑さは克服しなければなりません。大きなベーカリーの手の届かないところを丁寧にやるところに道が開いているような気がしてなりません。若いパン職人達にもこの思いを伝えていこうと考えています。そしてどんなに近代化が進んでも、パン作りは時代遅れでいいのではないのでしょうか？



多様文化部会見学会だより



多様文化部会部長
INABA NOBUYOSHI
稲葉 巨快

《東京芸術大学美術館・収蔵庫・ガンダーラとシルクロードの美術》

2000年8月25日・参加者22名

上野の山の芸大名物、蝉しぐれに迎えられ
当会最初の見学会。

芸術大学教授「六角鬼丈氏」設計・当美術
館の展覧会には、個々に行っていただける
であろうが、今回は六角工房の好意で詳しく
内部の説明を受ける事が出来た。

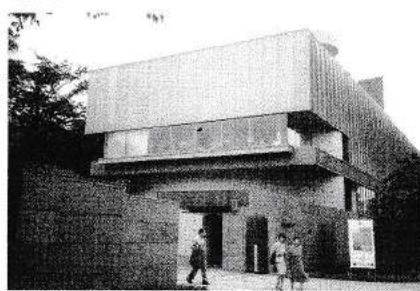
めったに入れない収蔵庫の見学も無理
を承知でお願いし地震や火事、カビや湿気
から守られた地階へと移動する。

なんとと言っても収蔵庫に設けられた「大
扉」はさすがにすごい、高さも厚みも立派
だが、表面加工の「漆」は見事である。ま
さか、中に収蔵されている作品よりも……
とは決して思わぬがまさに圧巻であった。

この中には国宝級の作品が多数納めて
ある、と本当に思える扉である。

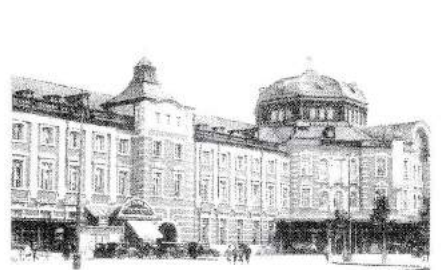
収蔵庫内はわりと無造作に収蔵されて
いたが、心地よい緊張感に包まれた。

ガンダーラ・シルクロードの美術展は、
前学長・平山郁夫氏収集のシルクロード文
物集220点余り、美術品として、また歴史
資料として両面から学ぶことが出来たと
思う。



東京芸術大学美術館

なお、今回は「赤レンガの東京駅を愛す
る市民の会(辰野金吾が設計した戦火に焼
ける前の東京駅に復元する運動もしてい
る)」の会員も参加され、見学後は上野駅
公園口の「文化亭」で、一献傾けながら賑
やかに交流できた。



大正3年、開業時の東京駅。この姿への復元という、よりロマン
ティックな計画が進められています。

《さいたまスーパーアリーナとジョン・レノン・ミュージアム》

2000年12月4日・参加者34名

僕が草野球をしていた頃の運動広場と
は、当然のことだが月とスッポン以上の違
いがあり、ここは日本初、世界的な最先端
技術を集結したスーパーアリーナである。
建築の進歩に感じ入る。

竪穴式住居時代の建築技術も、それなり
に時代の花形であったであろうに、20世
紀の終りには此処まで可能になった。

各地には同様の施設があるのだ、とま
あ、こんなことに驚いていたなら、専門家諸
氏に笑われるかもしれないが。

ガイド嬢の説明を受けキョロキョロ、ゾ
ロゾロ、覗いたり見上げたり、さわったり
座ったり。全体を眺め細部にふれて、ちょ
っとトイレも拝借して来た。

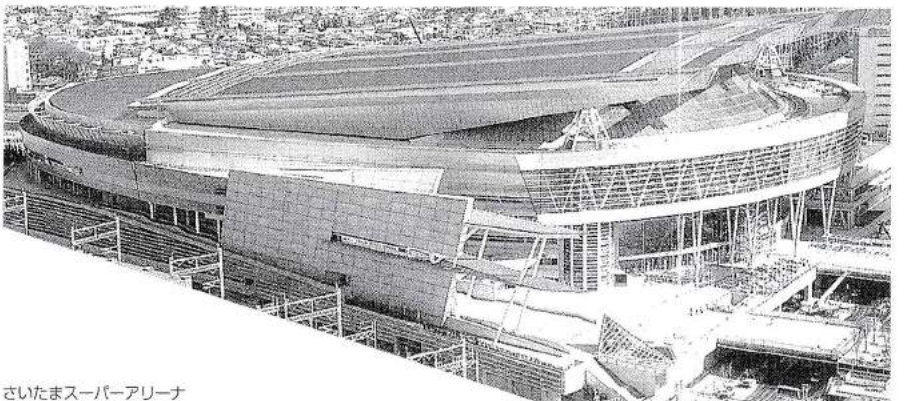
選手達の汗の匂いよりも、完成直後のコ
ンクリートのそれが勝つロッカールームも
通り過ぎ、空間や座席数を用途に応じてパ
ターン設定し、アイドルグループの公演イ
ベントの利用もあると聞けば、おのずから
メインアリーナ全体から光と音と歓声が
聞こえてくる。

音と言えば、同施設4F・5Fには元ビー

トルズ「ジョン・レノン・ミュージアム
(JLM)」が出来た。

JLMの見学中、口々に「青春プレイバック」と
言い出し自分のあの頃が、展示されて
いるジョン達の思い出と共に甦ったの
だ。

次々にブレイクし企画を可能にする彼
等の立場に、ある種のおこがれや羨望を抱
いてもいたが、あまりにも人気者になりすぎ
た不自由さと、ルールを壊したいが壊せ
ない苦悩も伝わってくる、「ヘルプ」と。



さいたまスーパーアリーナ

アピアランス



aaca会員
造形作家
KAWAGUCHI KIYOSHI
川口 潔
静岡県駿東郡清水町柿田45-25
TEL 0559-75-2996
「サイバーシティ 20-2」
200×145cm

「地球というかぎられた空間で、ITの発展による過剰な情報が、飽和状態を越えると、自分を維持出来なくなる大量の人間を産みだすだろう」と、思想家ドブレ氏は警告する。

IT文明は明、暗の両面を抱えており、ドブレ氏は情報量をコントロールするメデオロジーを提唱するのだが。



aaca会員
写真家 陶芸家/
MOCHIZUKI MASASHI
望月 正史
東京都世田谷区成城7-34-5-102
TEL 03-3483-7278
「祭り」
Lマンションロビー
40×40

生活の中で人が集う場所を創造する時、さまざまな表情を表現することを心掛け、「作品」「場所」「人」が調和し、心地よい空間になることを目指し制作しました。



aaca会員
造形作家
IWASA JUNKO
巖佐 純子
福岡市早良区原1丁目27-16
TEL/FAX 092-843-4256
「A White Flower in the Forest」
甘木市水の文化村
200×150×40cm

数千年の歴史を持つパピルスと現代建築の主たるコンクリートが作り出す世界を追求し、テーマは主としてarchaeologyとlandscape。古代、花、森等の色々な物語を創作表現しています。



aaca会員
造形作家
MURAMATSU SETSUKO
村松 勢津子
東京都町田市金井町1993-25
TEL/FAX 042-734-4044
「The memory of my journey」
2001.瓦、鉄
70×170×120cm

二〇〇一年 五月 東京京橋かねこ・あーとで個展をした。この作品は旅行者の目で捉えたベルリンの思い出である。終生私の夢は、現代建築空間に作品を置き、造形の確かさと社会的思想にチャレンジしたいと考えている。

CONTENTS

文化・芸術と都市空間	1
時代の華一輪	5
aacaトーク	6

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせください。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会でいきます
のでご了承下さい。

発行：日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：00110-2-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見満

副委員長 高部多恵子

北村孝昭、石田真人、山崎輝子、浅野由紀夫

長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三

事務局長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

aqca

aqca 会員募集

協会では会員を募集しております。
お知り合いの方をご推薦ください。
詳細は事務局まで
お問い合わせ **03-3457-7998**